



わたしの聖戦

女性が働くことについて

106

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

ラオスの女子たち

短い夏休みを利用して、ラオスを訪れた。

行ったことのある人も多いだろうが、同じインドシナ半島にあるタイやベトナム、カンボジアに比べると、イメージがわきにくいかもしれない。ラオス旅行に行くとき、「海がきれいでしょうね」と言った人もいたが、ラオスは東南アジア唯一の内陸国であり、海と接してはいない。

空港では、思いのほか若い女性ガイドが待っていてくれた。両手を胸の前であわせて軽くお辞儀をするラオス式挨拶に、気持ちのいいものを感じ、いかにもラオスに来たと

いう実感を得た。「シン」と呼ばれる巻きスカートがよく似合っている。

今回取り上げたいのは、ラオスの若い女子の生感である。くだんのガイドさんとは、同じ女性ということもあって、たちまち意気投合した。本当はもつと長い名前なのだが仮に「カイ」さんとしておこう。このカイさんが、実にぶっ飛んだ女性であることが徐々にわかってきたのだ。

まず、髪を短くし、茶色に染めている。顔つきもどこことなくラオス人離れしており、（しかし正統なラオス人ではある）

いわゆるバタくさいというヤツである。そのカイさんが、夜クラブへ行こうと誘ってくれた。もちろんこれは仕事を離れたプライベートな時間を共有しようという意味である。

ラオスには「ラオスビ

シャツとジーンズ姿で現われたカイさん……



のビール好きで、もう目をむくような勢いでビールを飲むのである。文字数の関係上、カイさんの言葉だけを並べてみる。こうなる。

「ラブもセックスも興味がない」、「結婚はどうでもいい」、「バンドを組んでドラムを叩いている」、「アイスクリームのお店を女友達と共同経営している」、「人に使われるのではなく、自分でツアーをアレンジしたい」など……

ール」があり、人々はこれに氷を入れて飲む。長くフランス領だったために驚くほどワインも豊富だが、ラオスの人々は断然ビール好きが多い。昼間と違って、シンではなくシャツとジーンズ姿で現われたカイさん、無類

日本の若い女性がこういったセリフを口にするのは理解ができるもの、ここはラオスだ。仏教建築とモン族を代表とする少数民族で成り立ち、山羊や牛がのんびりと歩く国である。私は、まじまじとカイさんの顔をみつ

めた。思えば、世界中のどの国も、こういった何気ない女子たちが、時代を、国を大きく変えていく原動力になったのではないかと。日本にも同じ時代があったはずで、伝統や古いルールに縛られないたくましい女子たちが自分の夢をかなえるべく、絶え間ない挑戦を続けてきたのだろうと。

カイさんの発言を聞いてみると、私はラオスという国の大きな転換期に立ち会った錯覚に陥った。国を変えていくのは政治家などではなく、今日の前にいる、恐れを知らない女子たちの手にかかっているのだろう。

ルールがゆるやかなラオスでは、車の運転に關しても寛容だ。ロックがながん流れる車を運転して帰っていくカイさんを見送り、この国の変貌を見届けたと思わずにはいられなかった。

イラスト・三浦義雄